

生活の伝承 11

発行者 民家園のつどい
会長 斎藤久一
発行所 福島市五老内町3番1号
福島市教育委員会文化課内
民家園のつどい事務局
TEL(024) 535-1111 内線5373



羽山ごもり

「金沢の羽山ごもり」のとき、このごもりに参加する人たちが必ず実行しなければならないことに「みそぎ」として、全身に水をかけて身も心も清らかにするこうりとり（垢離取り）という修行があります。

寒中の吹きさらしの中で「しめ井戸」という井戸水をかぶるのですから、つらい修行がありました。

冷たい水を心をかためてかぶるのですが、つめたいのでエイッとカヤーッとか声を出さないではいられませんから、誰も彼も水をかぶるときには自然と掛け声を掛けることになるのです。

ところで、その掛け声の中に、多くは年配の「こうりとり」をする方の中にエイッとカヤーッとかではなくて、ダイゴウリ ダイゴウリという掛け声をかける方があるのです。

この「ダイゴウリ」は「代垢離」のことで誰かに代わって、つまり誰かのために代わってみそぎ（禊）をしてあげていることになります。そのことがはっきりわかることがありますのは、この羽山ごもりの中では「こそう」という若者が、他の先輩よりも多くのつらい「こうりとり」の修行をしなければならないことになつてているのです。これを、この「こそう」の先輩である「かしき」という役目の方がたが「こそう」のつらさを知つていてそれを助けるために「こうりとり」を代つて、水をかぶつて下さることが多いのです。その時に祈られる「ことば」が「だいごうり」なのです。

いつか、「こそう」たちは先輩がこのつらい修行を外から、そつと代つて下さっていることを知つて、やがて「かしき」という先輩になると、きまつて後からくる「こそう」という後輩のために、先輩がしてきたと同じにこの「代ごうり」を続けてきているのであります。

卷頭言

だいごうり

民俗の伝承

留守居行の話

秋山政一

「かげぜん」という行為がある。

父が「古峯原詣り」に出かけた村であった。母は毎朝いつもの飯台とは別な黒いお膳にご飯と汁とおかずを並べて仮壇のわきにおいていた。この、朝食のおぜん

が「かげぜん」というもので、母というよりも私の家族みんなが全体で、父が、

無事に旅行から帰るのを祈る行為であることは随分あとで分かつたことである。

会津の例は、伊勢詣りに出た家に、縁者の者が家族を旅に出した家の不安をなぐさめることができが主な行為であつたようである。

私が、まだ少年の頃、といつても小学校五年生の時、私の兄が仲間と一緒に先達という案内人につれられて飯豊山詣りに出た。夏休み中のことであつたが

などといながら、川上に張つたしめ縄の端をさすつては、もどつてきて何度も続けてから家に帰つた。

詣りに出た。夏休み中のことであつたが

兄たちの一行為が帰るまでの三晩水ごりが続いて、四日目には一行が帰つて

きして、自分たちで飯をたいて一汁一菜の食事をした。いわゆる「別火」の修行

は、私の家の者だけではなくて、一行の

こもり」というのは、鎮守の社殿に寝起きして、自分たちで飯をたいて一汁一菜の食事をした。いわゆる「別火」の修行であつた。

そして、一日に何度か、社の側に流れ

る沼田堰という川で「みそぎ」をした。

この「おこもり」の七回目の真夜中に、道案内の先達様につれられて飯豊のお山へ出て行つた。

出発した夜の次の晩から、私もふくめて同行者の家族の者は、夕食がすむ

ところ、この鎮守に集つて参拝した後に、兄たちが、水ごり(みそぎ)をとつた堰で兄たちと同じように「お山晴天身体堅固」

が、「かげぜん」というもので、母というよりも私の家族みんなが全体で、父が、

無事に旅行から帰るのを祈る行為であることは随分あとで分かつたことである。

旅に出た者のある家で、このよだな旅の者が鎮守様の堰で「水ごり」をとるの

は、私の家の者だけではなくて、一行の

この、兄の飯豊山参拝のあいだ、家族

は、私の家の者だけではなくて、一行の

家々の者も、私たちと一緒に、お山晴天

身体堅固」を唱えながら水ごりをとつて

は礼拝を続けたのであつた。

いま考へると、私たち家に残つた者

は、飯豊山参拝に出た私の兄を含めた

一行のお山における無事を祈る行為であつたわけである。

また、留守の者が旅先の者に不幸な

でき事のないようにするという行為に

(総合日本民俗語彙)。

また、足利市外の農村には、親類の者が長期の旅行—伊勢詣りなど—toしたとき、その縁者の者が軽い手土産など

大旦の大壇

久 藤 一 斎

私の家の前に愛宕神社が祀られている
る高さ4米ほどの人工の壇がある。

子供のころよく遊んだ神社で、今は
神社の奉贊会役員をしている。目の前
の神社なので粗末にはできない。

この地は元和五年正月、上杉藩から

三十町歩の荒地開拓の許可を得て四人
の武士が帰農し開墾してきた土地であ
つたが、寛永年中、度重なる阿武隈川の

洪水氾濫に苦しみ悩む部落民の惨状を
見た、時の代官古川善兵衛が大きな壇
を築くことを提唱、部落民もこれに同
意し六部経を埋納し洪水の際の避難壇
として築いたのが、今に残る大壇であ
る。その当時、東の山からの土石運搬は
すべて人力だったことを思うと容易なも
のでなかつたことは十分理解できる。

壇上の面積は、僅か十二坪程だが「享
保十九年追々洪水ノ節八九人(戸)屋敷
一同壇ニ登り小屋掛ニテ五七夜(三十五
日)程ヲ過ス」という記録もある。

大壇という地名は大きな壇を築いた
頃から自然発生的に名付けられたもの
であつたと思われる。

壇上に愛宕堂が建てられたのは、昭
和七年のこと、文知摺観音境内にあ
る多宝堂を建築した山口村の名工阿部
宇源次の作であることは、福島市史に
も明らかのことである。私の戸籍簿謄

本には間違えなく岡苗村字大壇とある。
それが、昭和二十七年に完成した耕
地整理の結果、字「大旦」と改められた。

壇(タン・タン)とは、土を盛つて高く

つくり、上部を平らにならした土台の
ことで、天地の祭りや諸侯の誓約とか
将相の任命などを行つた土の台のこと、
と学研の漢和大字典にはある。また旦
(タン)とは、あした・日の出・日の出る
ころ・朝・よあけ・元旦などの意で、壇
もタンとは読むこともあるようだが、そ
の意は大きな違いである。

にもかかわらず、戦後当用漢字や常
用漢字などの制定により、それに迎合
したのか便乗したのか、それが戦後の新
しい文化だと安易に認めてしまつた先人
たちがいたことは誠に残念でならない。
しかも、岡山耕地整理組合は「区域変
更調書」を県に申請し、県は福島市議會
の同意議決を得たい旨を市議會に諮問
し、市議會はこれをうけ、二十七年十月
四日同意決定して県に答申し、県はそ
の答申を受けて県報で公示し字名の変
更は決まつた。

古来、地名などは固有の名詞なので、
そのまま残すべきである。その地名に
は祖先と私たちの汗と涙の歴史物語が
あることを忘れてはならないと思う。
この題名も「大壇と大旦」とすべきだ

つたかと思いながら、地名のもつ歴史を
もつと真剣に認識すべきではないだろ
うか、と思う。今ようやく「歴史認識」
とか「心の教育」とかが叫ばれている。

せめて自分の住む地名の由来とか歴
史ぐらいは、確かな認識をもつて、一度
と愚かな過ちを繰り返すことのないよ
うにしたいものである。それが、祖先さ
まへの感謝報恩であり、功德というもの
では、と年頭にあたり考えてみた次第
である。



福島の蚕ことば（抄）

—走り書きのまま—

太田 隆夫



蚕を生育し、繭として出荷するまでの段階にはいろんな作業があり、それ

ぞれの言葉がありました。言い替えれば職人が使う言葉みたいだし、業界用語というものもありました。

まず始めは、蚕が種子紙についた卵から生れ一~二枚のワラダに移すこと、この作業をナデルと言いました。蚕業指

導員用語では「掃き立て」というものを使います。

種子紙を温めると、小さく黒い毛虫が生れます。これを毛蚕（ケゴ）、また蟻のようなので蟻蚕（アリゴ）とも呼びました。ケゴが卵から出てしまうと羽簞（毛刷毛とも）を使って種子紙から静かにワラダ（蚕座）に落します。

このとき羽簞でケゴを撫でるように

扱うので、そのままナデルと表現したの

で、カイコサマとして一目置いて暮らす

なにせ蚕は大事な現金収入の生き物

農家では、心を傾け優しく対処しまし

た。「掃き立て」というと折角の福を「掃き出す」みたいだと言うところからナデ

ルが通用しました。

羽簞は鶏の羽根、つまり翼で作りま

したが右利きの人は左の方、左利きの

人は右の翼が、ナデルに具合がいいとさ

れました。また山鳥の翼も好まれたそ

うです。山鳥の羽簞でナデルと「繭が山

のようになる」という願いに結びつい

ていました。

また雑子の羽根も使われました。雑

子の親は自分が焼けても、いのちを捨て

ても子（蚕）を守るという縁起を心に浮

かべて、ケゴをナデタそうです。そう言

えばケゴという言葉もいつかしら「稚蚕

」という用語に変つてしまつていきました。

ケゴに桑を与えて三、四日ほど過ぎ

ると蚕は最初の脱皮となります。脱皮

は繭をつくるまで四回繰返します。蚕

は桑を食べることをやめて静止します。

指導員は一眠とか一齡と言いますが、

農家ではヨドミとかヨドムと言つていま

した。クワヤスマとも表現しました。

それで初めの桑やすめをヒトヨドミ、

またはシシノヨドミと言う、一日ほどの

あと再び桑を食べ始めるなどをヒトオ

キ、シシノオキと呼んでいました。脱皮

がすみ、桑を食べはじめるのは眠りから

起きることであり、一回目が終つたから

と单純にヒトオキと言つたり、また桑を

食べ始めるのでクワヅクとして安心しま

した。この蚕をシシコと言いました。

蚕が育つてくると、桑を食うときは

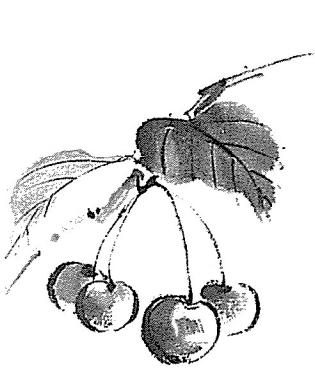
「さあーっ」と雨の降るような音が蚕部

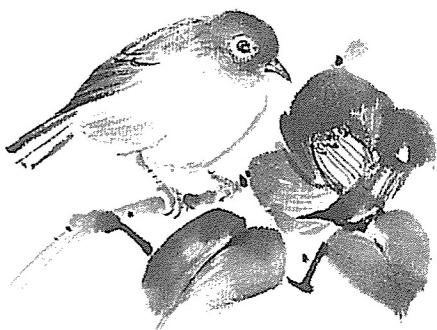
屋に充满します。養蚕家の先人はまた

この音を川の流れと聞き、脱皮のため

静かになるのを流れが静かになるところと感じてヨドム・ヨドミの言葉をあて

たものでしようか。





二回目のヨドミはフタヨドミ、またタカノオキ、そして蚕をタカコと呼びました。ヨドミ明け、桑やすめのあとは、蚕が食べ残した桑の葉、葉脈、それに大量の糞を取り除くシタタデの作業があります。蚕が小さいころは、ワラダに目の細かなアミを敷き、その後はリューギュ(蘭草)でこしらえたアミを敷いていたのでシタタデはこのアミを持ちあげ、アミについている蚕とアミからこぼれた蚕を清潔なワラダに移します。

残ったのが「ガス」つまり蚕が出した滓であり「蚕滓」という意味なのでしょう。指導員用語では「蚕沙」と呼びました。これをタンガラに背負って桑畠の肥料としたり、綿羊の餌にしたりしました。

蚕が小さくなると桑も食いつかなくなるので、桑の葉を細かにちぎり、それをワラダに敷いていたのでシタタデはこのアミを持ちあげ、アミについている蚕とアミからこぼれた蚕を清潔なワラダに移します。

食べ残した桑の葉、葉脈、それに大量の糞を取り除くシタタデの作業があります。

カノヨドミと違い、その後はフタオキ・タカノオキ、そして蚕をタカコと呼びました。

前となります。そして七、八日後になる

と、蚕はいよいよ繭をつくるように成長しました。

繭をつくるようになつた蚕は、桑も食

わずワラダの中や縁のあたりで首をのばし始めます。身体の色も少し黄ばん

てきて、水飴みたいにやや透明になります。これをヒキコと言い、この状態に

入つたのがヒギル、ヒギハジメとなりま

した。

沢山のヒキコをワラダから拾つて、今度はマブシに手でばらばらと播くよう

に入れました。ヒキコが一ヵ所だけにな

ると繭の中に折悪く一匹の蛹(ヒビツ)

が入り、一匹の繭より大きいオヤメ(玉

繭)をつくるので均らしてマブシに納ま

るようしました。

マブシにヒキコを入れるのをコヒカ

シ、訛つてコシカシ(少年のころ腰貸しと覚えていました。)と称し忙しくなり応援を頼みました。応援の人はコシカシ手伝いで、手早く作業をすすめました。

ヒキコをワラダから拾つて入れる。盆

状の軽くて丸い紙製のものはコシカシボ

ンでこれに山盛りに拾つてマブシに納め

三回目のヨドミをミノヨドミ・フナノ

ヨドミ、起きるとミオキ・フナノオキ、蚕はフナゴになります。最後の脱皮が二

ワノヨドミ、ヨンオキの蚕がニワゴの名

前となります。そして七、八日後になる

と、蚕はいよいよ繭をつくるように成長

しました。

繭をつくるようになつた蚕は、桑も食

わずワラダの中や縁のあたりで首をの

ばし始めます。身体の色も少し黄ばん

てきて、水飴みたいにやや透明になり

ます。これをヒキコと言い、この状態に

入つたのがヒギル、ヒギハジメとなりま

した。

沢山のヒキコをワラダから拾つて、今度はマブシに手でばらばらと播くよう

に入れました。ヒキコが一ヵ所だけにな

ると繭の中に折悪く一匹の蛹(ヒビツ)

が入り、一匹の繭より大きいオヤメ(玉

繭)をつくるので均らしてマブシに納ま

るようしました。

マブシにヒキコを入れるのをコヒカ

シ、訛つてコシカシ(少年のころ腰貸しと覚えていました。)と称し忙しくなり応

援を頼みました。応援の人はコシカシ手

伝いで、手早く作業をすすめました。

ヒキコをワラダから拾つて入れる。盆

状の軽くて丸い紙製のものはコシカシボ

ンでこれに山盛りに拾つてマブシに納め

る人に運びます。一方ではマブシをひろげ、マブシカダメとして細い角棒に連続

してついている半円形の針金のところへマブシの稜角をはさみ込む作業もありました。

なおマブシは藁で作られていましたが、技術改良がすすみ蚕部屋に下げるようになりました。同じようにコヒカシも「上簇」そしてアガルと変りました。

ヒキコが納まつたマブシを蚕棚に上げました。これをヒキコと言い、この状態に

入つたのがヒギル、ヒギハジメとなりま

した。これも訛つてゼビラと言いました。

菰を縦にして真ん中と左右を両面から

細い割竹で押さえ、ずれないように結んだ平らなものです。

エビラの本来の意味は、武具の一つで矢を入れて右腰につけるものとされて

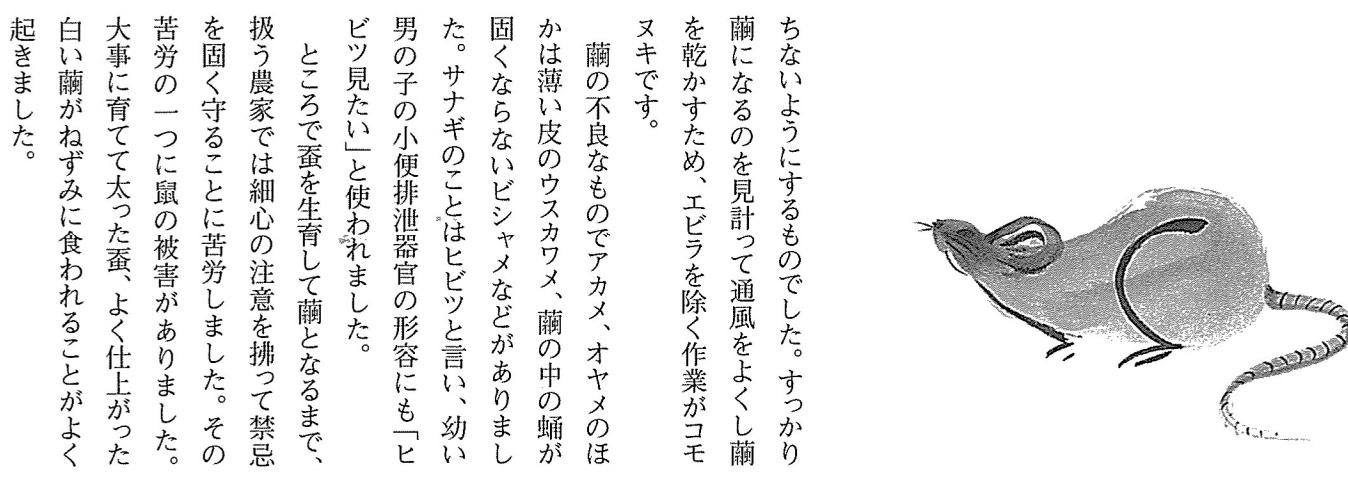
いましたが、大鎧の両肩についている「大袖」がコヒカシのエビラ状に見えることから、この名称に転用となつたのでしょうか。

エビラにマブシを乗せるのは、上の棚

のヒキコが繭をつくるとき出す小便(体液)が下の棚の繭をよごしてアカメ(赤

繭)になつて値打ちがなくなるのを防止

し、蚕の形が軟化して体液を出して崩れてしまう病気のナガレコ、白く粉をふいて固まるオシヤリが下のマブシに落



この鼠の被害のないよう農家では、近隣の靈験あらたかな社寺からお幣束やお札を受け申ってきて蚕部屋の入口や四隅に掲げその威力にすがりました。猫の役目になつて鼠どもを追い返してほしいと念じました。それでお幣束やお札を授けてくれる神社はネコ明神とかネコイナッシャマ(猫稻荷さま)という名称で親しまれました。

でも一番効き目があるのは「ねずみ」という言葉を使わないこととされました。暮らしの中で「ねずみ」と呼び捨てにするなどここで聞いている鼠は怒つてよけいに悪さをするといわれ、忌言葉にして使うことを避けたり禁止しました。

その代りとして蚕を生育中には必ず「ねずみ」と言わないでヨルノモノ、ヨカゼ、アネサマ、テツチヨ(天井のこと)、テツヨノアネサマ、オフクサマなどを言葉としました。

蛇を描いた絵馬、猫の絵を借りたり書いてもらつて蚕部屋に下げておくのも「鼠除け」と言わず「ヨカゼヨケ」として期間中の蚕安全を祈つて作業に励みました。

さて四回のヨドミにシンとか、タカフナ、ニワと言う名称がついていましたが、これには次のような伝説が土台となつ

ていてクワヤスメの目安としてきたと言われています。

むかし天竺(てんじく—インド)の国

に一人のお姫さまがいました。お姫さまは繼母に憎まれ、苦しめられて四回も災難にあわされたといいます。

お姫さまが受けた災難の一回目は、

獅子の棲む山に捨てられ、二回目には

鷹が棲む高い山に、三回目は舟に乗せ

られ川に捨てられました。四回目は宮

殿の庭に埋められたのに不思議に助か

ることことができました。そこでとうとう

父親は、繼母の目を盗んで姫を船に乗

せて海へ逃がしてくれ、やがて常陸(茨

城県)の豊浦の浜へ流れ着いたと伝えて

います。

そこの漁師に助けられ、蚕の飼い方を村人に教えたのが我が國の養蚕のはじまりになつたという物語です。それでこのお姫さまの四回の災難が蚕の四回のヨドミの名称に使われ、それぞれにシン、タカ、フナ、ニワの符牒みたいな言葉の由来、縁起となつたと伝えられてきました。

ちなみに市内黒岩の鎮守春日神社参道の右側にある沢山の供養石塔に天保十年(一、八三二)造立の「蚕養神碑」があります。この碑の裏面には「從常州蚕養浜蚕養石得來茲石下納以立石」の銘

文が刻まれています。

常陸国の蚕養浜の蚕養石を戴いてき

て、村の養蚕安全と繁盛を祈願してこ

とに埋納し碑をたてたという意味を伝

えています。常陸の蚕養浜とは天竺か

ら蚕を伝えたというお姫さまが漂着し

たところの「豊浦の浜」と思われます。

それから市内方木田(旧土湯街道南

にある鎮守の稻荷神社は「ネコイナッ

シヤマ」といわれています。この社の幣

束、お札こそ「鼠除け」の靈験あらたか

たといわっていました。この社の幣

束、お札こそ「鼠除け」の靈験あらたか

たといわっていました。そこでのうとう

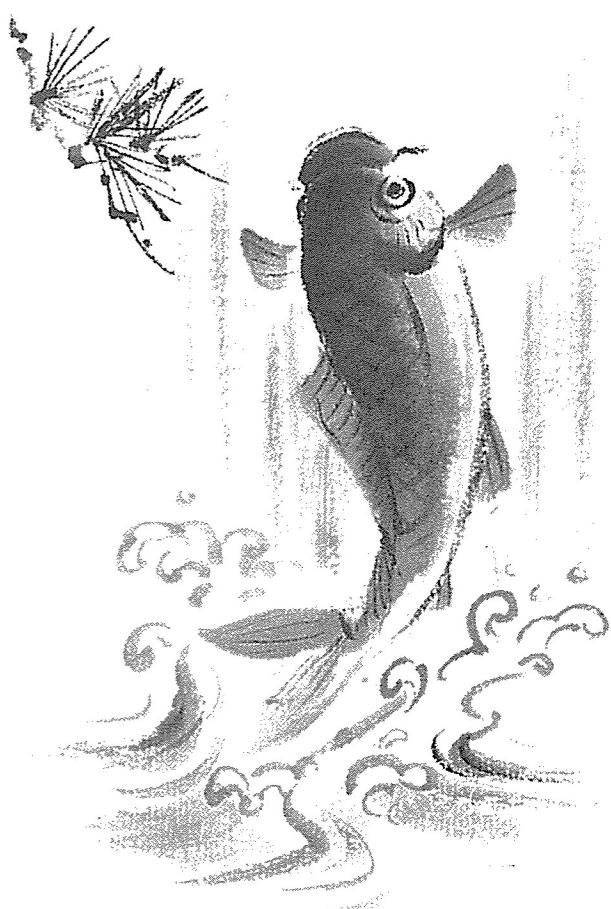
になつて戦後の一時期は捨て猫が多か

ったといわれていました。

またメユカキ(繭かき)やイトトリに

もいろいろな作業と言葉がありました

がまたの機会になります。
だつたのでしょうか。
ネコイナッシャマは、猫の代りになる
ほど靈力があるという意味でした。そ
れがいつしか変化してこの境内に病氣の
猫、飼い手のいない子猫を納めると罰が
あたらない、猫に祟られないということ
になりました。猫が多かつたといわれていま
した。



いい景色みつけた

山本 英夫

私の民家○の担当は客自軒である。建物の6軒は住宅であり、2軒は言わば宿屋である。

もう1軒は今年、国の重要文化財に指定された広瀬座である。

客自軒は、江戸時代から大正時代までは、割烹旅館であった為か立派な庭園があり、この庭を眺めるのが何よりの楽しみである。

いつもは先ず廊下に腰掛け 庭を眺め、それから座敷に上がり、胡座をかい 外を見る。

いつのことだつたか、各民家には、そ の時期の仕事が割り当てられたが、客自軒は特異な存在である為、特に用件の割り当てが無かつた。

これ幸いと、方々から客自軒とその庭の見方を変えてみた。

旧東棟(平屋)の西側の道路から客間を通じて庭を見ると、先ず飛び込んでくるものは、囲炉裏の自在鉤と鉄瓶である、これは庭を見ると同時に生活が入り込み、庭の見方が変わってしまう。100年以上も前に、誰かと誰かが囲炉裏を囲んで決茶を飲みながら、いや熱爛を傾けてどんな話をしたのか…

その頃、割烹旅館に入れる人はエライ人に限られた筈だから天下国家を論じたに違いない。

何しろ、客自軒から紅葉館と名前を変えたのは河野広中だそだから格が違う。

次に旧北棟(2階建)に足を移し、南側に廻つてみた。

外から部屋の中の道具等を通して東棟の各部屋と庭が見える、昔は壁は極端に減らして障子や

ふすまとし、開け放しが当たり前だつたようだ。

それから少し移つて障子を開けると2つの部屋から庭を見ることが出来る、庭の北側には2階建ての篠家があり、庭を一層引き立てている。

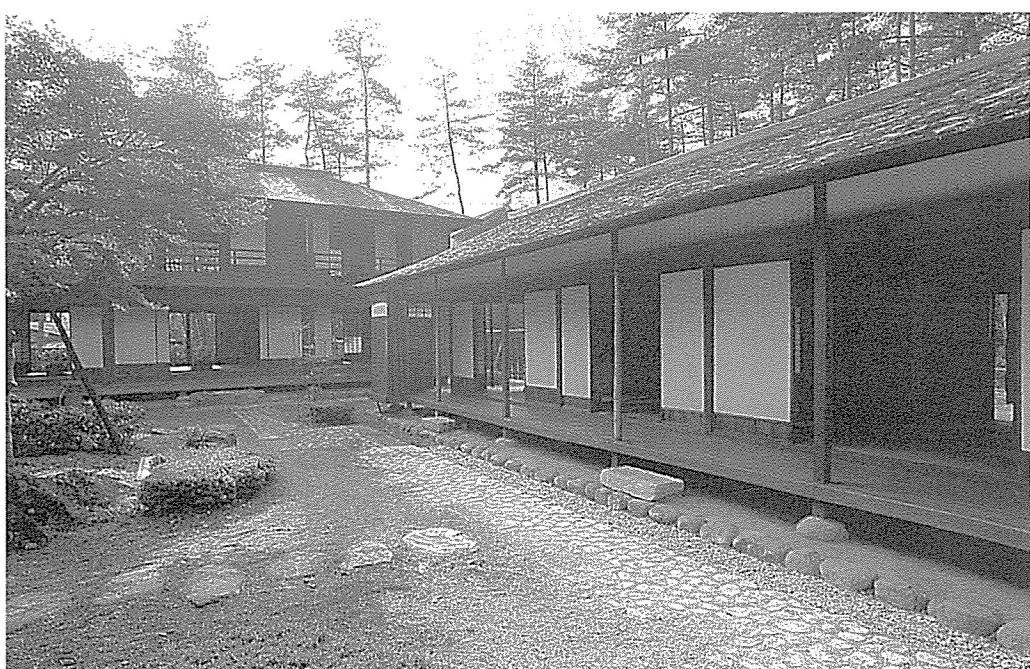
天の橋立の股覗きと云うのがある、両足で左右の景色が遮られる、上は股で遮られる、ただそれだけのことである。

何時の頃から始められたか今でも続いている、平成の時代に理屈もいわずに今の若者がだまつて真

似をして喜んでいる。

客自軒の庭を見るのに唯眺めるよりは梁と柱と床に遮られた四角の黒い枠が趣を変えてしまう。

面白い。
いい景色みつけた。



わらべうた

● ちゃつくりとりうた(お手玉とり)

(渡利地区)

お一つ お一つ お一つ お一つ おひ
ともお二つ お二つ お二つ お二つ お
二つ おふたもおんみ おん三つ おん三
つ おん三つ。おん三つ おんみよ おい
つ おまえからかえし てんやのかんば
んおじょくな おじょくな おじょくな
あんめ あんめ あんめ あんめでおでこ
おつたいびつき びつきそんめ そんめおつ
さい おつさい おつさい おつさえおなが
しおながしおながし おんなもおつかい
おつかいおつかい おつかいもみとし もみ
としもみとし もみとしばた ぱつぱつ
たもんみもかつき かつきかつき かきと
しばたばた かつきも一俵 一俵 二俵
三俵 三俵も俵を返し 俵を返し 俵を返
し 俵も一あさ ひと朝たんたん 二朝た
んたん 三朝たんたん 四朝たんたん 五
夜もたんたん たんたんのつこい とっても
こい とつてもこい たんたん太鼓石太鼓
油あげ煮つめてよぶからこい とってもこい
たんたんたい道 向こうの小山に見ゆるは
何ぞ まま母さまの 月が光る のつても
こい とつてもこい 隣のおばさん一ほかしま
した まねんで

● まりつきうた

(福島地区)

おらが隣の千波様は 七つ八つから金掘
ならつて 金を掘るやら掘らぬやら 一年
までども状がこぬ 二年までどもまだ見え
ぬ 三年三月の夜の夜中に状が来た 誰に
来いとて状が来た おせんに来いとて状が
きた おせんいねも死んだもさ いつの
何日死んだもさ おせんのお墓はどこにあ
るいつも御山の墓どころ 墓のぐるりに
砂まいて 砂のぐるりに杉植えて 雨風吹
いてもからうろ からうろ

● かぞえうた

(信夫地区)

越中富山の千金丹 鼻くそ丸めて万金丹
それをのむやつ あんぽんたん

かつちゃん かずの子 にしんの子 猫
にとられて大きわぎ

おらが隣のてんててんの娘 嫁にい

かぶの子だ かぶのこだ 三つとせ 蜜柑

ふた又大根はらまして 生させてみたらば

食べる金はない 錢箱あざいでどやされ

たどやされた 四つとせ 用のない座敷

にふたり寝て わよしこよしと寝て語る

ねてかたる 五つとせ いつ来てみてもこ

の長屋 開から開までお多福だ おたふく

だ 六つとせ 無病息災たまむすび 風雨

さわれば色変る いろかわる 七つとせ

なんなん宝をお手に持ち もつたら宝は離

すまい はなすまい 八つとせ 屋敷広め

て蔵建てて 錢蔵金蔵たてならべ たてなら

べ 九つとせ こつこつ鳥が虚無僧か 五

条の橋でいくさする いくさする 十とせ

とつもらつた玉手箱 あけてみたれば白

煙 しろけむり 十とせ とんとんたたく

誰さんだ お神楽さんだらあけてやれ あ

けてやれ

わるくち集

● まねこと (瀬戸内地区)

まねこと 万歳 当万歳 十になつたら

くつたばれ

みんみん山から風吹いてこ あとからく
るやつ 戸をばつちん 負けてくやしつか
骨なし 皮なし みたくない

ぬかれつぞ

うそをこいたら 地獄さいげ 鬼にべろ

みかんきんかん

みかんきんかん 酒のかん 親父のせつ
かん 子はきかん らつきよう らつきよう

ぬかれつぞ

らつきよう らつきよう も皮ばかり

(立子山地区)

生らつきよう

● おとこと (湯野・東湯野地区)

おらが隣のばか婿さまは 提灯買うの 忘つ
ちえ 馬のだんべこ 買つてきた

ひとりふたり たっぺのこ あこたれむく
たれ糞さらい そのくそなめだの だん
じやべな ちちんぶいぶい こがねさらさら
ぢやあばさばさ

七日の晩げ お月さまおがむどつて 猫

のげすおがんだ

のげすおがんだ

● おなごと (荒井地区)

おとこと おなごと まめいつた
つてもいつても なあまぐせい